

# 九世紀におけるビザンツIIアラブ国境地域

——テーマ制度・捕虜交換・『ディゲニス・アクリタス』——

井 上 浩 一

はじめに

今日のシンポジウムのテーマは国境ですが、国境といいますが、思わず身構えてしまう、ちょっと怖い存在ではないでしょうか。これに対して、大和言葉の「くにざかい」には、国境とは違つて、なんとなく穏やかな雰囲気を感じられません。川端康成『雪国』の冒頭の有名な一節について、「こつきょうの長いトンネルを抜けると雪国であつた」と読むのか、それとも「くにざかいの長いトンネル」とかという論争があることは御存じかと思ひます。一般には「こつきょうの長いトンネル」と読まれているようですが、私

の感覚には「くにざかい」の方がしっくりきます。

私のこのような感覚の根底には、近代国家の厳しい国境イメージがあります。つまり、地球の上に線を引き、ここから内側は自分たちの国、自分たちの世界、向こう側は他国、他人の世界とはつきり区別する、それが国境です。よそ者がむやみに入つて来ることを拒否するのが、まさに国境に他なりません。

このような人為的な線、国境線が近代以前になかつたわけではありません。よく知られているのは、世界遺産にもなつている古代ローマのリームスでしょう。ローマ帝国は征服・拡大を止めた段階で、

自分たちのローマ世界とその外側の野蛮世界を線で区切りました。ライン川やドナウ川のような自然国境に加えて、長い城壁を造つて区切つたのです。国境線リームスには、リミタネイ（国境防衛部隊）が配備されました。

しかしローマのリームスのような国境線は近代以前では例外でした。明確な国境線、内外を厳しく分かつ境界線ではなく、どこまでが自国なのか、どこから外国なのか、はっきりしない曖昧な境界地域が、ふたつの国のあいだにあるのが普通だつたようです。実はリームスにつきましても、今年の五月に刊行されました南川高志さんの岩波新書『新・ローマ帝

『国衰亡史』は、線ではなくゾーンとしての国境であったとし、ローマ帝国という国家を見直すうえで重要な点だと述べておられます<sup>1)</sup>。

今日は、この古代ローマ帝国が中世に生き残った東ローマ（ビザンツ）帝国の国境についてお話しいたします。資料1「九世紀半ば頃のビザンツ帝国」をご覧ください。ビザンツ帝国はアジアとヨーロッパ、東洋と西洋にまたがる国家でしたので、各方面に国境をもっていました。今日お話ししたいのは小アジア東部の国境です。

対象として東部国境を選んだ理由を述べておきます。地図にもありますように、九世紀にビザンツ帝国の東に存在したのはアッバース朝、イスラーム教徒アラブ人の国でした。アラブ人は七世紀の後半と八世紀初めの二度にわたってコンスタンティノープルを包囲し、ビザンツ帝国を滅亡寸前に追い込んだこともある、恐

るべき危険な外敵でした。キリスト教国家ビザンツ帝国にとって、宗教的な対立も含めて、最大の敵だったのです。それゆえ、アッバース朝と向かい合う東部国境は、他の国境以上に敵しい環境にあつたと想定できます。それが東部国境を取り上げた理由です。

では本論に入って、九世紀のビザンツIIアラブ国境について、三つの側面からみてゆくことにいたします。

## 1、テーマ制度

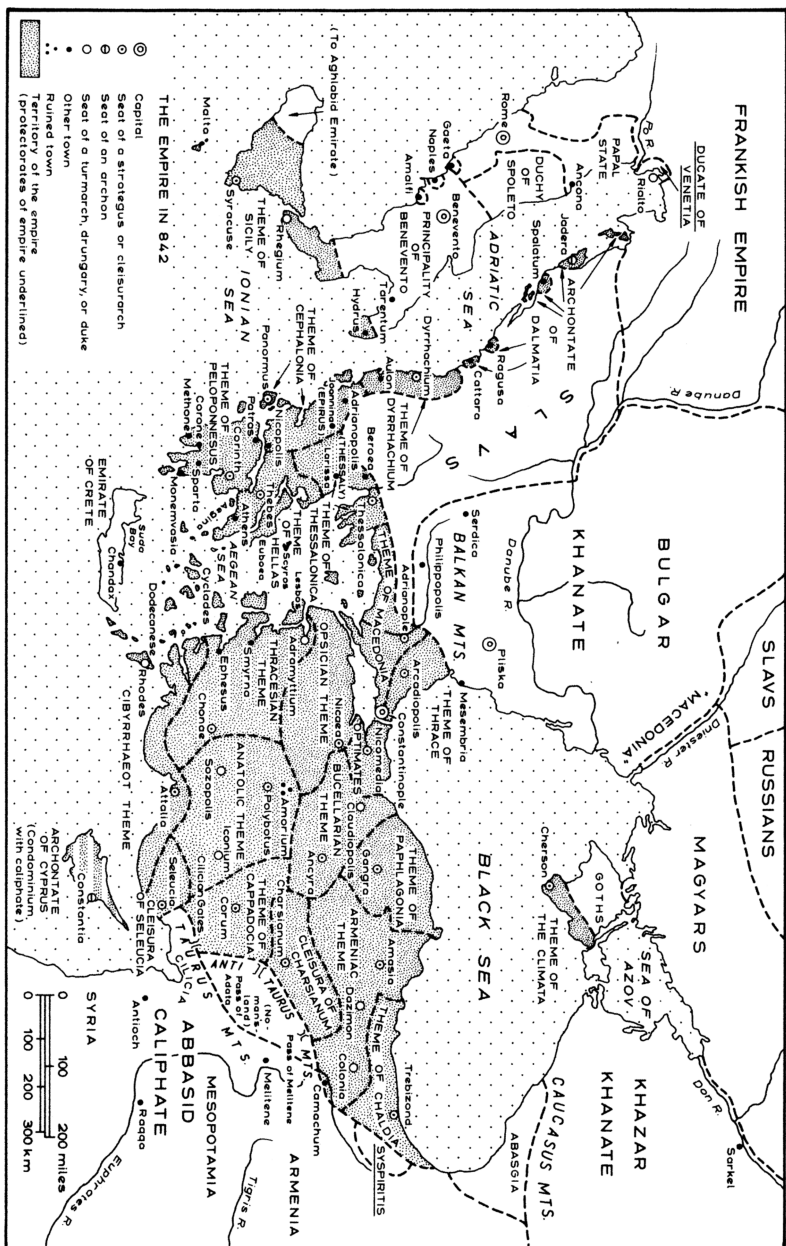
### ——国境防衛の方法

全に併合しようと、六七四〜七八年と七一七〜一八年の二度にわたって都コンスタンティノープルを包囲します。しかしながら結局、陥落させることはできず、八世紀半ば以降のアッバース朝時代になりますと、帝国の存在そのものを脅かすような攻撃は少なくなりました。

それに代わってアラブ人が展開したのは略奪遠征と呼ばれる作戦です。つまり相手を滅ぼしたり、領土の拡大を図るのではなく、金品や捕虜の獲得を目的とした軍事作戦です。主要な略奪遠征は夏に行なわれ、七月にビザンツ領へ侵入し、戦利品を持って九月はじめに帰るという方式をとりました。この遠征は略奪を目的とするだけではなく、イスラーム教徒の義務とされたジハード——アッラーのための神聖な戦い——の実践という宗教的意味もありました。九世紀にはこの略奪遠征が繰り返されました。

このようなアラブ軍の侵入に対してビ

資料 1 「9世紀半ば頃のビザンツ帝国」



九世紀におけるビザンツニアアラブ国境地域

ザンツ帝国はどうか対応したのでしょうか。アラブ軍に対抗する組織として生まれたのが、高校世界史の教科書にも出てくる有名なテマ（軍管区）制度です。テマ制とは、「軍団の司令官が各駐屯地域の軍事と民政を行い、屯田兵制により国境防衛を行った」（『角川世界史辞典』「軍管区制」）ものです。最初のテマは七世紀に小アジアで成立しました。アラブ人の侵入の真つただ中のことです。

テマ制度のもとで行なわれた対アラブ戦争の特徴をもう少し細かく見てゆきます。テマ制研究の第一人者である関西学院大学の中谷功治さんは、テマ制度による国境防衛について印象的な言葉を述べておられます。「まず注目したいのが、当時小アジアから国境線が消滅していたという点である。」この言葉は、国境で敵をくい止める、敵を国内に入れないという作戦をビザンツが断念したことを指しています。古代ローマのリミタネイ

（国境防衛部隊）はすでに解体しており、それに代わったテマの軍団は国境を守ろうとはしませんでした。両国間の山岳地帯は無人のまま放置され、アラブの略奪部隊は自由にビザンツ領に入ることができたのです。

それでは国内に入ってきたアラブ軍にどう対処したのでしょうか。もちろんテマの軍団が出勤するのですが、その場合もまた、真正面から敵と戦うことをできる限り避けています。それに代わって、

住民や家畜を安全な要塞都市や山奥にいち早く避難させようえて、兵糧攻めをはじめ、さまざまのゲリラ戦術でアラブ軍を苦しめ、撤退を余儀なくさせるという戦略をとりました。テマ軍団がもとにもに戦うのは、アラブ軍が故郷に戻るべく国境の山岳地帯を通過する時だけだったようです。アラブ人との長い戦争の経験をもとめたビザンツの戦術書は次のように記しています。「敵がローマ帝国（＝ビ

ザンツ）に侵入しようとしているところを迎え撃つのではなく、彼らが我が国から自国へ戻るときに敵に向かうのが、多くの点で有利であり適当である。」<sup>③</sup> 帰り道なら、敵は捕虜や戦利品をもっていて動きが鈍いうえ、長期の遠征で疲れているので勝てる可能性が高い、峠道を通る敵を不意打ちするという作戦です。逆に言いますと、通常の戦闘では勝てる見込みはないので、できる限り戦いを避けるといふ戦略です。

のちほど確認いたしますように、テマ制度のもとでビザンツ軍が行なったゲリラ戦は、かなりの戦果を挙げました。この点と関わって私が強調したいのは、ビザンツ側は戦争の被害を最小限にとどめるため、防衛に専念していたことです。そもそもテマ制度それ自体が防衛的な組織でした。テマ軍団の基本的な任務は担当地域の防衛であり、軍団を構成したのは、平時は農業に従事し、敵が侵入して

きた時に武装して従軍する農民兵士でした。先ほど引用しました『角川世界史辞典』は「屯田兵」と表現しています。地元という地の利はゲリラ戦にきわめて有効であり、自分たちの町や村を守るということで、兵士たちの士気も高かったと思われれます。

テマ軍団が防衛に専念していたことは、その戦術や兵士の構成だけではなく、テマ制度の解体過程からも確認できます。十世紀にアッバース朝が衰退し、ビザンツ軍がイスラーム世界へ攻め込むようになり、テマ制度は次第に機能しなくなります。戦争が地域防衛から対外遠征に変化するとともに、長期間にわたって農地を離れるようになった農民兵士は貧困化し、没落してゆきました。農民から兵士を徴募するというテマ制度から、職業軍人や傭兵を主力とする軍事制度に移ってゆくのがまさにこの十世紀です。

テマ制度のもとでアラブ人と戦った長

い歴史、正確に申しますと、戦いを避けた、あるいは防衛に専念した歴史は、ビザンツ人の戦争観に大きな影響を与えました。戦争は悪である、できる限り避けるべきである。やむを得ない戦争、正しい戦争とは防衛戦争であるという、ビザンツ独特の観念がこの時期に確立したようです。<sup>(4)</sup> 西欧の十字軍やイスラームのジ

ハードのような聖戦、すなわち戦争を神が命じる崇高な行為とみなす観念がビザンツ人のあいだでは発達しなかったのも、このような経験があつたためだと思われまます。宿敵といつてよいイスラーム教徒アラブ人に対しても、できる限り戦いを避け、平和を追求したことは、次にお話しする捕虜交換にもみることができまます。

## 2、捕虜交換

——戦争と平和の交錯

ビザンツ帝国とアッバース朝は戦争ばかりしていたわけではありません。いま

お話ししましたように、ビザンツ側はなるべく戦いを避けようとしていましたし、イスラーム側にも平和への動きがあつたことは、両者のあいだで戦争捕虜の交換が繰り返されたことから明らかです。東部国境の状況を考える手がかりになると思われまますので、捕虜交換について簡単に述べておきます。<sup>(5)</sup>

ビザンツとイスラームが戦争捕虜を交換したという最初の記録は、イスラームの歴史家タバリの『予言者と諸王の歴史』(以下『歴史』と略します)の七五六／七年の記事です。「この年、マンソール(カリフ、在位七五四～七五年)とビザンツの君主が捕虜の交換に合意した。それによつてカリフはイスラーム教徒の捕虜を取り戻した<sup>(6)</sup>」とあります。ビザンツ側の初出は、『テオファネス年代記』七六八／九年の条で、「この年、(捕虜の)交換がシリアで行なわれた。男一人と男一人、女一人と女一人、子供も同じ

である」と記されています。八世紀半ば、つまり、ジハードを掲げて侵入してきたアラブ人が、ビザンツ帝国を滅ぼすのではなく、略奪遠征へと戦争の形態を変えた時期、戦争を繰り返しつつも、共存せざるを得ないという認識が両者のあいだで生まれた時期に、捕虜交換は始まりました。当初散発的に行なわれていた捕虜交換は、九世紀に入ると頻度が増し、次第に慣例の行事となつてゆきます。

では、交換はどのように行なわれたのでしょうか。タバリ『歴史』が詳しく伝える八四五年の捕虜交換を例にとつて具体的に見てゆきます。交換記事は、ビザンツ皇帝の使節が捕虜を釈放するよう申し出たところから始まっています。八四五年だけではなく、たいいていはビザンツ側から提案していたようです。確かに、ビザンツの戦術書には戦後の捕虜交換を念頭においた記述が見られます。「戦争が完全に終結するまで捕虜、とくに敵の

もとで名譽ある者や有力な者を殺すな。……敵の捕虜と交換に友人や同盟者を受け取るようにせよ」とあり、さらに「もしも敵が交換を望まないなら」と続けており、イスラーム側が交換を拒否する場合があつたことも窺えます。

ビザンツ側の提案を受けて、交換の具体的な方法について協議が行なわれます。一番紛糾したのは交換される捕虜の人数でした。『テオフアネス年代記』七六八／九年にもありましたように、交換は一対一が原則でしたが、ビザンツ側がもつていた捕虜は大部分が成人男子であつたのに対して、イスラーム側の捕虜には女性や子供が多く、ビザンツの使節は単純な一対一の交換はできないと主張したようです。双方の捕虜の構成は、イスラームの略奪遠征とビザンツのゲリラ的抵抗という、この時期の戦争形態と一致します。つまり、アラブ兵が町や村を略奪して女性・子供を捕虜とし、ビザンツ軍が

ゲリラ戦でアラブ人兵士を捕えた、というわけです。

捕虜交換について細かく調べますと、意外なことがわかります。防戦一方だつたビザンツ側がむしろ多くの捕虜をもつていたのです。八四五年の交換でも、イスラーム側は数を合わせるためバグダードでキリスト教徒の奴隷を買い、さらに宮殿にいたキリスト教徒奴隷も交換に出しています。ここから、テマ軍団による防衛作戦がかなりの戦果を挙げていることがわかります。全体としてみた場合、イスラームの略奪遠征は経済的にはさほど成果はなかつたと思われまます。それでも繰り返されたのは、ジハードという宗教的な義務のためでしょうか。確かに、イスラームの略奪遠征は時とともに形骸化したと言われていますし、ビザンツ側が正面からの戦闘を避けたことも考え合わせますと、東部国境地域の戦争は全面的対決ではなかつたようです。やや結論

を急ぎました。捕虜交換に戻ります。

捕虜交換が合意されますと、まず休戦条約が結ばれます。戦闘行為の中止が捕虜交換の大前提でした。交換は八世紀半ばから二百年間ずっと同じ場所で行なわれました。ビザンツ都市セレウキアと、イスラームの略奪遠征の基地タルソスのあいだ、ややセレウキア寄りを流れるラモス川です。川の東側にイスラーム、西にビザンツの役人がそれぞれ捕虜を並べ、交換が行なわれます。八四五年の交換について、タバリは二通りの言い伝えを併記しています。ひとつは、両岸から同時に捕虜がひとりずつ徒歩で川を涉り、川の中央ですれ違ったとの伝承、もうひとつは、双方が橋を架けてそれぞれの捕虜を対岸に送り返した、というものです。どちらが本当なのかよくわかりませんが、この時には、四日間で四四六〇人も交換していますので、ひとりひとり川を徒歩で涉ったのではなさそうです。

## 九世紀におけるビザンツⅡアラブ国境地域

橋を使ったにしては時間がかかっていますが、それには理由があったようです。史料にカリフと皇帝の名前が挙げられていることからわかりますように、捕虜交換は国家的な行事でした。また、釈放されたイスラーム教徒は「アラは偉大なり」と叫んだといえます。キリスト教徒も同じようなことを言ったようです。つまり皇帝やカリフにとって捕虜交換は、「捕虜となつた臣下を救い出す、慈悲深い皇帝」、あるいは「敵に対しても寛大なカリフ」の存在を謳い上げる、またとない機会だったので。それゆえに、交換は儀式化され、ひとりひとり丁寧に行なわれたものと思われます。

国境地域の人々は捕虜交換をどのように見ていたのでしょうか。八九六年の捕虜交換には近隣の都市からも人々が見物に来ていました。<sup>10</sup>上に述べたような皇帝・カリフのイメージを広めるための動員だったのかもしれませんが、地

域の住民自身は、皇帝やカリフの思惑とは少し違う角度から捕虜交換を見ていたのではないかと私は考えます。アラブ人もビザンツ人も、捕虜交換を平和の回復、日常生活への復帰と受け止めていたのではないのでしょうか。そう考える理由は次の通りです。

捕虜交換に先立って結ばれた休戦条約は、交換終了後四十日間有効とされていきました。八四五年には四十日後に戦争が始まっていますが、多くの場合、四十日が過ぎても休戦条約は失効せず、自動延長されています。すなわち、捕虜交換は平和の始まり、平和を謳い上げる儀式でもありました。なお、この四十日という規定は、いうまでもなく、関係者がそれぞれ町の町や村に安全に戻るための措置でした。この点からも、ラモス川は交換のための仮の国境線で、両国間に明確な国境線はなかったことがわかります。

記事対照表

Grottaferrata 写本 (13c. 末～14c. 初)	Escorial 写本 (15c. 後半)	露訳版 (12, 13c.)
1 巻 1-197 ----- 198-337	冒頭部欠落、1-55	
2 巻 1-49 ----- 50-300	56-224	1-9
3 巻 1-343 ----- —(欠落)	225-609	
----- —(欠落)	610-621	10-11
----- —(欠落)	622-701	13
4 巻 1-47 ----- 48-253	702-791	11
----- 254-855	(欠落)792-1065	
----- 856-952	1066-1088	16-19
----- 953-970	1089-1094	
----- —(欠落)	1095-1096	
----- 971-1093	—(欠落)	20-22
5 巻 1-289 ----- 6 巻 1-175	—(欠落)	
----- 176-310	1097-1196	11-12
----- 311-475	1197-1315	
----- 476-713	1316-1420	
----- 714-805 (785/6 欠落)	1421-1551	13-15
----- (795-798D Aがマグシムを殺す)	1552-1605	
7 巻 1-229 ----- (106-155父の死、189-198母の死)	1606-1659	
-----	1660-1694橋と墓	
8 巻 1-141 ----- 142-198	1695-1793	
----- 199-313(238-244D Aの墓)	1794-1867	
-----	—(欠落)	

3、『ディゲニス・アクリタス』の世界  
——国境地域の人々

ビザンツ帝国の東部国境地域は、アラブ軍が毎年のように侵入し、略奪してまわる、それに対してビザンツのテマ軍がゲリラ戦で対抗すると、ずいぶん物騒な世界と考えられてきました。しかしながら、戦争の実態や捕虜交換などをみますと、一般に想定されているような戦争一色の世界ではなかったようです。それはこの地域の人々はどのように暮らしていたのでしょうか、国境の向こうの人々をどう理解していたのでしょうか。残念ながら詳しいことはわかりません。ビザンツの歴史史料は皇帝・中央政府に関するものが大部分で、国境地域のこと、ましてその一般住民についてはほとんど記していないからです。

そのなかにあつて、九く十世紀のビザンツIIアラブ国境地域を舞台とした英雄



資料2 『ディゲニス・アクリタス』

テーマ	エピソード
1、アミールの結婚	①アミールの略奪・誘拐～妹の奪回に向かう兄弟 ②妹を探す～一騎打ち～アミールの結婚～ディゲニス・アクリタス(DA)の誕生 ③母の訴え～アミールの一族・郎党はビザンツへ
(2、DAと盗賊)	①DAの教育 ②DAがアベラテス(盗賊・追剥)に加わろうとする
3、DAのロマンス	①DAの成長 ②最初の狩 ③ <b>テマ長官の娘を誘惑する</b> ④DAの結婚と妻の嫁資 ⑤DAは国境地域に移り住む ⑥DAの両親の死 ⑦ <b>皇帝との会見</b>
4、DAの武勇(1人称叙述)	① <b>アプロラヴディスの娘(アラブ人)を助ける</b> ②5月の牧場、蛇・ライオン・盗賊との対決 ③3人の盗賊を倒す ④マクシム(アマゾネス)とメリミツェス ⑤DAが盗賊とマクシムを倒す ⑥DAが再度マクシムを倒す。暴行
5、宮殿と庭園	①ユーフラテス河岸の宮殿と庭園 ②DAが国境に平和をもたらす
6、DAの死	①DAの病、生涯の回顧、妻への忠告 ②DA夫婦の死 ③DAの葬儀と追悼

叙事詩『ディゲニス・アクリタス』は、この地域の人々の姿を伝える貴重な史料と言えます。ちなみにディゲニスとは「ふたつの生まれ(アラブ人とビザンツ人の混血)」、アクリタスとは「国境の人」と言う意味で、主人公の名前です。以下、この英雄叙事詩を手がかりに国境地域の人々について考えることにします。

『ディゲニス・アクリタス』は民衆のあいだで歌われてきました。語り継がれるなかで変化したうえ、十二世紀に文字化されてからも、さらに書き換えられて、さまざまの写本が伝わっています<sup>1)</sup>。しかし残念ながら、九世紀に生まれた元の物語を復元することは不可能なようです。

ここでは、もっとも古いふたつのギリシア語写本(イタリアの修道院で見つかった *Grottaferata* 版とスペインの図書館にある *Escorial* 版)を中心に考察してゆきます。(資料2『ディゲニス・アクリタス』記事対照表<sup>12)</sup>参照)

物語は両親の馴れ初めから始まります。デイゲニスの父はアラブ人のアミールです。アミールとはアラビア語で「司令官・総督・地方支配者」を意味します。

デイゲニスの父はシリアのアミールと呼ばれていますが、恐らくアッバース朝のシリア境界地区（スグル）——タルソスを中心都市です——から略奪遠征を繰り返していたアラブ人部隊の司令官がモデルと思われます。母はビザンツ人です。物語では、国境に近いカツパドキア・テマ（軍管区）の長官の娘とされています。まさに敵<sup>たて</sup>同士ともいえるふたりは、次のようないきさつで結婚しました。

テマ長官の父が追放の身であり、兄たちも国境地域に出かけていた時に、シリアのアミールが長官の屋敷を襲い、娘をさらってゆきました。兄弟がアミールのもとへ行き、妹を返すよう要求しますと、アミールは兄弟の勇敢さに感心し——「ローマ人の言葉」（ギリシア語）が完

壁に理解できたと叙事詩にはあります——、自分と一騎打ちして勝てば返すと答えます。一番下の弟が一騎打ちを挑んで勝ちました。敗れたアミールは、自分でビザンツへ行き、キリスト教徒になるから、お前たちの妹、あの美しい娘と結婚させてくれと兄たちに頼みます。兄弟はそれを許し、一行は揃ってカツパドキアに戻ります。盛大な結婚式が執り行なわれ、やがてふたりのあいだに子供デイゲニスが生まれました。

ところがシリアにいるアミールの母から、お前の背信行為のために、自分たち残された者は辛い状況にあると訴える手紙がアミールのもとに届きます。ビザンツ人の妻を連れてシリアに帰ってくるよう、母は頼むのです。板挟みになったアミールは、妻に事情を打ち明け、妻子を残していったんシリアに戻ることにします。必ず帰って来ると約束して出発したアミールは、シリアに着くと母親を説得

して——その際にはイスラームとキリスト教の教義問答も展開されます——、母や一族・郎党を伴って妻のもとに戻って来ます。

話はこのあと、アミールとテマ長官の娘のあいだに生れたデイゲニスの成長、冒険と恋愛の物語に移ります。本来の『デイゲニス・アクリタス』英雄叙事詩ということになりました。アラブ人とビザンツ人のあいだに生れたデイゲニスは、子供の頃から武勇に優れ、青年になるとテマ長官の箱入り娘をさらって結婚します。このエピソードは父アミールの結婚とよく似ており、元々はひとつの話ではなかったかと思われま

す。それはともかく、結婚したあとデイゲニスは両親のもとを離れ、妻と召使を連れてユーフラテス国境地域に住んで、その地方のならず者を退治します。その評判は都にまで広がり、皇帝がわざわざ面会にやって来るほどでした。叙事詩はデ

イゲニスの武勇をさまざまに謳い上げています。なかには、婚約していたビザンツ人の将軍に捨てられたアラブ娘を救ってやるが、ついでにその娘を犯してしまふというような、けしからん話も含まれています。「記事対照表」にもありますように、Ecceidial版はこの話を省いています。英雄にふさわしくないと判断したためでしょうか。やがて両親は死に、デイゲニス夫婦も子供がないまま、若くして死ぬことになります。彼の葬儀にはビザンツはもちろん、イスラーム世界からも多くの人が訪れて、英雄の死を嘆いたと叙事詩は結ばれます。

以上、あらすじを紹介いたしました。導入部、デイゲニスの両親の物語は、異邦人の男女を結びつけた愛を称えています。敵であったアミールがビザンツ人の娘への愛ゆえに屈服した、仲間になったという愛の賛歌です。同時に、愛の背後にあったものを知ることができます。資

料3「デイゲニス・アクリタス関係者系図」からもわかりますように、双方の一族の名前には、九〜十世紀に実在したビザンツ人、アラブ人、アルメニア人、さらには帝国東部に広がっていたキリスト教異端（パウロ派）の指導者を思わせるものが少なからずあり、人種も宗教も異なる人々が、国境地域においてひとつの世界を創り上げている様子が窺えます。

物語の後半、デイゲニスの武勇伝には意外な特徴があります。すでに多くの研究者が指摘していますように、デイゲニスの敵はアラブ人ではなかったということです。ライオンや熊、ドラゴン（蛇のこと）などを除きますと、主な敵として現われるのは、アペラテスと称されるならず者（盗賊・追剥）で、盗賊を退治して、国境地域に平和をもたらした人、アクリタス（国境の人）と称えられるわけですが、盗賊はほとんどがキリスト教徒です。

なぜアラブ人が敵として現われないのかについては諸説あります。有力な説は、語り継がれてきた物語が文字になった十二世紀には、ビザンツの主たる敵は、もはやアラブ人ではなくトルコ人だったからというものです<sup>1)</sup>。しかしこのような説明には疑問があります。そもそもトルコ人はほとんど登場しませんし、物語の原型が創られた九世紀においても、確かに戦争が繰り返されたものの、ビザンツ人とアラブ人が必ずしも不倶戴天の敵でなかったことはすでにお話しした通りです。アラブ人が敵として描かれない理由を私は次のように推定します。中央で編纂された歴史書や年代記が戦争に注目したのとは違って、国境地域の人々は、アラブ人との対立・抗争よりも、むしろ交流の側面——捕虜交換も含めて——を自分たちの「歴史」として語り継いでいたからである。これが私の解釈です。つまり、国境地域という「記憶の場」における集



合的記憶が、デイゲニス・アクリタスという架空の英雄を生み出したのです。デイゲニス（ふたつの生まれ）は、まさにその名の通り、イスラームとビザンツという異質な世界の交流や共生の象徴とみなすべきでしょう。アクリタスを「国境の人」と訳しましたが、「くにぎかいの人」と言った方がよかったかのもしれません。

この点と関連して、ビザンツ皇帝に対するデイゲニスの態度も注目します。デイゲニスの活躍を聞いた皇帝が会いたいと申し出たところ、自分から皇帝のもとへ行くつもりはない、会いたければユーフラテス川まで来て欲しいと返事が返ってきます。やって来た皇帝に対してデイゲニスは、自分は陛下の奴隷ですと、ビザンツ人の決まり文句でもある殊勝なことを言う一方で、もし皇帝の兵士が余計なことを言ったら、皆殺しにするぞと脅しています。皇帝から恩賞を貰い、国

境地域の統治を任されるものの、皇帝に対するデイゲニスの態度は素つ気ない、よそよそしいものです<sup>15</sup>。しかも、叙事詩の原型を残している可能性が高いロシア語版——現存するギリシア語写本より古い十二〜十三世紀の翻訳——では、デイゲニスはやって来た皇帝軍と戦って、完膚なきまでに打ち負かしています<sup>16</sup>。これもまた国境地域の人々の意識を反映したものでしょう。

#### おわりに

時間が参りました。お話ししたことを簡単にまとめておきます。

九世紀におけるビザンツIIアラブ国境は、異なる文明の対立の最前線とみられてきました。確かに歴史書・年代記は戦争の記事で満ちています。しかし今日ご紹介しました、(1)テーマ制度のもとの戦争の具体的な様相、(2)ビザンツ帝国とアッバース朝のあいだで繰り返された

捕虜交換、(3)この地域に生まれた英雄叙事詩『デイゲニス・アクリタス』などから、両国の国境地域は、対立や戦争の世界であると同時に、異なる人々が交流、共存する世界でもあったことがわかります。『デイゲニス・アクリタス』の叙事詩はまた、国境地域がコンスタンティノールやバグダードとは異なる世界、皇帝からもカリフからも距離のある、独自の世界だったことも示唆しています。

そうだとしますと、たとえば現在問題となつています尖閣諸島も、そこを生活の場としてきた沖縄や台湾の漁民たちにとっては、確かに漁場をめぐる争いはあったでしょうが、もしどこかの漁船が難破したなら、国籍や言葉は違っても救助するといった世界、東京や北京の論理、つまり近代国家の国境の論理とは異なる世界ではなかったのか、と私は想像します。

国境地域の人々の姿、とくにその交流

や共存・共生の側面を歴史的に明らかにすることは、現代世界にとっても意味のあることだと思えます。本日のシンポジウムがその一助となることを願って、報告を終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

## 註

- (1) 南川高志『新・ローマ帝国衰亡史』岩波書店、二〇一三年、二九〇―三二ページ。
- (2) 中谷功治「テーマの発展——軍制から見たビザンティオン帝国」『古代文化』四二巻二号、一九八九年、八―二二ページ。中谷氏は近年、テーマ制度に関する注目すべき論稿を次々と発表しており、(中谷功治)「テーマ制の起源を再考する」『西洋史学』二四四号、二〇一二年、一―一八ページ(など)。
- (3) *Three Byzantine Military Treatises, Corpus Fontium Historiae Byzantinae*, XXV, G. T. Dennis, ed., Washington D. C., 1985, pp. 156-58.
- (4) ビザンツ人の戦争観については、井上浩一『ビザンツ 文明の継承と変容』京都大学学術出版会、二〇〇九年第七章「戦争——必要悪——」参照。
- (5) 捕虜交換について詳しくは、Campanolo-Ponitau, M., "Les échanges de prisonniers entre Byzance et l'Islam aux IXe et Xe siècles," *Journal of Oriental and African Studies*, 7 (1995), pp. 1-56. 相野洋三「ビザンツ—東方ムスリム間における捕虜交換について」『関学西洋史論集』二二号、一九九八年、五―二二ページ。井上浩一「ビザンツ帝国の戦争——戦術書と捕虜交換——」『関学西洋史論集』三四号、二〇一一年、一三―二七ページ(など)を参照。
- (6) *The History of al-Tabari*, 40 vols., State University of New York Press, 1985-2007, vol. 28, J. D. McAuliffe, tr., Albany, N.Y., 1985, p. 55.
- (7) *Theophanis Chronographia*, C. de Boor, ed., Leipzig, 1863, p. 443.
- (8) *The History of al-Tabari*, vol. 34, J. L. Kraemer, tr., pp. 38-44.
- (9) *Leonis VI Tactica, Corpus Fontium Historiae Byzantinae*, II, G. Dennis, ed., Washington, D. C., 2010, pp. 348-350.
- (10) *The History of al-Tabari*, vol. 38, F. Rosenthal, tr., p. 33.
- (11) Jeffreys, E., *Digenis Akritas: The Grottaferrata and Escorial Versions*, Cambridge, 1998, pp. xviii-xxvi; Trapp, E., *Digenis Akritas: Synoptische Ausgabe der ältesten Versionen*, Wien, 1971.
- (12) Jeffreys, E., *op. cit.*; Hull, D. B., *Digenis Akritas: The Two-Blood Border*, Lord, Athens, Ohio, 1972.
- (13) 太田敬子『シハーードの町タルスース』刀水書房、二〇〇九年。
- (14) Oikonomides, N., "L' épopée de Digenis et la frontière orientale de Byzance aux Xe et XIe siècles," *Travaux et Mémoires*, vol. 7 (1979), pp. 375-97.
- (15) 皇帝との会見はGrottaferrata版(四巻九七―一〇九三行)のみが伝えている。Jeffreys, E., *op. cit.*, pp. 124-132.
- (16) 中村喜和「ロシアの『ディゲニス・アクリタス』——中世ロシアの翻訳作品に寄せて」『一橋論叢』五六巻1号、一九六六年、六二―七二ページ。